トロン・パス（5 416m）　　アルパインツアー　　‘10 年 4 月 24 日～5 月 7 日

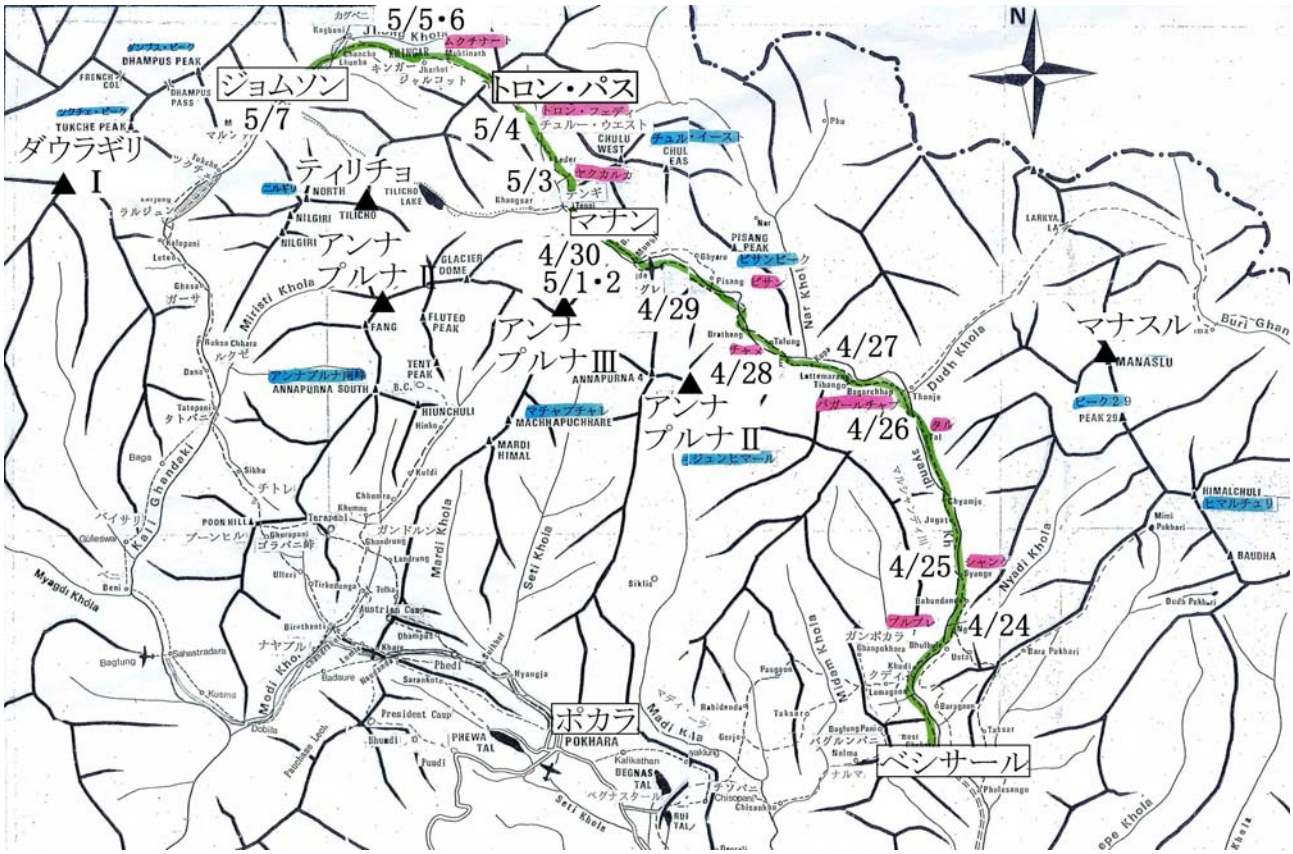
昨年の 10 月にヒマラヤのティリチョレイクからメソカント・パスを目指したが大雪のため失敗した。ベシサールからマナンまでの 8 日間は前回と同じコースであり、その先を前回はメソカント・パスを目指して西へ進んだのに対して、今回は北上してトロン・パスを目指した。今回はまあ上手くいったのでリベンジしたといったところか。

１．プロローグ

今までは、バンコック経由でカトマンズに入ることが多かったが、今回は初めて仁川集合で、名古屋発の四日市さんと大阪発の海南さん達と合流した。

カトマンズはスルーして、その日のうちにアンナプルナ地域の登山起点であるポカラに入る。さっそく難題にぶつかった。ネパール全体がストライキに入ったらしい。この国の政治にはマオリストというやつが幅を利かせている。国王が王政を投げ出してしまって、一応民主化され

スト中なので、飛行場からホテルまでの荷物はポーターが手で運んだ。



たのであるが、政権を受けたはずのマオリストも投げ出してしまった。まあそんなことはどうでも良い。この国の反政府主義者の良いところは、産業としては山の観光しかないということを良く解っているので、われわれ観光客には手を出さないということであると思っていた。しかしストライキをされては車が走れない。ツアーリーダーの佐々木さんから「初日は停滞です」と知らされた。いきなり「ガクッ」である。しかしポカラの飛行場からホテルまで歩かされただけで、翌朝にはストライキは回避されたので行程通りのスタートを切ることができた。

メンバーは、男 5 人、女 7 人で計 12 人の例によってジジババ軍団である。5 月の連休を挟んでのツアーであるので、間違って紛れ込んでくる若いお姉ちゃんを期待したのであるが、最近の若いやつらは間違っても変な選択はしない。ツアーリーダーの佐々木さんとは‘08 年 5 月の台湾（玉山・雪山）以来だ。

２．トレッキング風景

ベシサールの手前で、カトマンズから車で来たガイドたちと合流して、初日の幕営地であるブルブレ（海抜 840m）で第 1 泊目になった。テントはフライシートの前室構造など、結構手の込んだやつで居住性は良かったが、自分で持てといわれたらこんな重そうなやつはお断りだ。食事はテーブルと椅子が用意されて、夜はこれが大きなテントで覆われる。例によってすべてガイドとポーターが至れり尽くせりでやってくれるので、われわれは大名旅行を楽しめる。

部屋割りは基本的には 2 人一組で、私の相部屋は元地方公務員の豊島さんである。静岡は磐田の出身であるということだけに、職場のサッカーチームでは数回の海外遠征経験も持つという。この 3 月で定年になったばっかりで、まあこのジジババ軍団の中では、“還暦小僧”とでも呼ぶこととしよう。なんせ 65 歳の俺でさえこのメンバーの中では、平均年齢以下ではないかと思われるんだから。山ではいまだにテント派ということで、結構強そうだ。眼鏡をかけても視力はコンマ以下ということで、弱視の部類に入るらしく、岩の多いところでの降りではかなり慎重に歩いていた。私以上の飲兵衛で、いつも寝る前のひと時をラム酒などで楽しんだが、昨年 9 月のヒマラヤで相部屋の調布さんと飲みすぎて、テントを壊したりしてヒンシュクを買ったので、今回は少し控えめにした。

このアンナプルナ地域では、われわれのテントや食料・われわれの個人装備などの荷運びは人が行う。農作物などの運搬は馬が担当している。エベレスト街道のようにヤクやゾッキョが運ぶことはない。

エベレスト街道の場合は登り始めルクラ飛行場で 2 800m あるが、今回のルートはブルブレが 840m でマナンまで 6 日間かけて 3 540m へ高度を上げる。ヒマラヤは緯度的には、日本で言えば奄美大島くらいに相当するわけで、熱帯である。いつもヒマラヤでは寒いし乾燥しているから“汗なんかかかないよ”といって、トレッキング中は風呂に入ることなんかない。しかし今回はたっぷり汗をかく。それでも道沿いにあるロッジが備えているシャワーのご厄介になることはなかった。欧米人は結構シャワーを使っているが、日本人のジジババは浴槽にたっぷり水をはった風呂でないと入浴設備として認めないのかもしれない。まあ私にとっては、汗臭くて不快感を持つのは周りの人で、自分は鼻が悪いから気にならないというタイプであるので意にも介さない。

前回はブルブレから 2 日間くらいはマルシャンディ川の左岸の自動車道を歩いたが、今回は右岸の畑道を歩いた。前回は橋の工事をやっていて車はブルブレ止まりであったが、今は完成したらしく左岸にはかなり奥のほうまで車が走っているようすが伺えた。2 日間分くらいは車で日程を稼げるようになったのかもしれない。しかしヒマラヤのことであるからあまり期待をしない方が良い。村の出入口には旅人を迎え入れる門のようなものも出てきて旅情を盛り上げてくれる。前回経験済みであるのでわかっていることであったが、このあたりではかなり登っているつもりでも高度差は稼げない。川沿いの道は高

巻き道が多く、登ってもすぐに降りに入って、結局たいした高度は稼げない。一日 6 時間も歩いて高度差が 400m であったりするとガッカリする。ふつう山では 1 時間当たり 300m は登れるとされている。このあたりの村には幼い子供の姿がやたら目立つ。しかし就学年齢に達したような子供は見かけない。後でジョムスンに行ったらたくさんいた。小学校くらいから寄宿舎に入るのか？　そんなこともないと思うが。複雑な経済事情なども絡むのであろう。

が、7 000m を超えるこのような山を見るために皆わざわざ日本から来ているわけであるのでワクワクしているようすがテントの中にいても伺える。ツアーリーダーの佐々木さんまで 6 時の起床時間前にテントから出て、“あれがⅡ峰です。こっちがⅣ峰です。”なんてやっている。それが普通なのであろうが、こっちは意地になって“起床時間前には絶対に出てやるもんか。”と、頭はすっかりおきているのに無理に目をつぶって寝続ける。

朝食の風景

トレッキング中に木の伐採現場に遭遇して、斬り終わるまで待たされた。テレビ番組では見たことがあるが、実際に目の当たりに見ることは初めてである。村人にとっての日常の出来事が、旅人にとっては新鮮な出来事に映る。

トレッキング 4 日目くらいから山がその雄姿を見せるようになる。まず見えてきたのはアンナプルナⅡ峰とⅣ峰か。まだまだはるかに遠い感じではある

テントの朝はシェルパのモーニングティ配りから始まる。“モーニングティ！”と言いながら各テントに回り歩く。これがモーニングコールであるから、ほんとうはシュラフから上半身だけ起こして、これを飲みながら起きればよいはずである。しかし今回のジジババはやたら死に急ぐやつが多くて、残り少ない人生を少しでも有効に活かそうと、このときにはすべて準備を終わらせて、6 時の起床時間には早くも朝食のスタンバイに入っている。この時間になると、もうあたりには日も当たってきているの

で屋外での気持ちの良い朝食が楽しめる。

ネパール北部ヒマラヤ地方は全体にチベッタン仏教の信仰の深い地域でありストゥパ（卒塔婆の語源といわれる）の類もたくさん出会った。このような門の形になっているものは別の呼び方をされるらしく、教えてもらったのであるが忘れた。

トレッキングの意味は、地元の人が使っている生活道を歩くということであるが、ネパールにとっては最大の外貨獲得源であるので、多分に観光

よく整備されたトレッキング道

この地域を訪れる人の大半が印象を持つと思われるピサン近くの巨大な一枚岩も通り過ぎる。

ピサンではヒドイ目にあった。3 340m であるので、この辺で酒を飲む限界にするつもりでいたが、“まあマナンまではいいかなあ”なんて、軟弱風が吹き始めたときだった。いつもならばテントサイトはロッジの庭とか畑が使われた。この日は適当な場所がなくて、馬か牛の放牧地が選ばれた。そばに一軒だけ雑貨屋みたいな極めてキッタナイ店があり、ポケットウィスキーが棚に並んでいた。

ティリチョピークを臨む峠

客を意識してかなり金もかかっている整備と思われる箇所がある。おそらく観光化される前は危険な箇所もいっぱいあったのであろう。つり橋などを含むこれらの整備はスイスの援助によるものがほとんどであると聞く。日本でも観光援助をしようとしたことがあるらしいが、援助した金がどう使われてしまうかわからないのでやらなかったという話を聞いたことがある。

巨大な一枚岩

埃にまみれたやつを意地汚く求めて、いつものように就寝前に豊島さんとの小宴会を始めた。妙にトロットした味がした。これがネパールウィスキーの味かとも思ったが、あまりにもおかしい。それでも 2 杯目まで飲んでやめにした。あの店がウィスキーを仕入れたのは 20 年前かもしれない。結果はひどかった。翌日は糞が小便状になるまで下した。もちろん残りは捨てたし、この日で酒は中断した。

ティリチョピークが見渡せる峠に出たが、佐々木さんはまったく無視して通り過ぎた。前回は往きも

還りもここで大休止を取ったが、ビューポイントに対する捕らえ方は人によって違うのであろう。ティリチョピークの雪の付き方は前回の雪よりも少ないようで、今回の方が山の条件は良さそうで期待が持てる。このあたりにはりんご畑が道の両側に続く。前回はりんごの実のシーズンでありたくさん食べたが、今回は花のシーズンであった。でも通ってきた道には結構りんごを売っている店も多かった。どうやって保存するのだろう。ヒマラヤにも紀伊国屋文左衛門がいるのかなあ。

りんごの木の畑

３．メンバー紹介

相部屋の豊島さんは前に紹介したので、その他の人を紹介する。

まず東北の福島さんご夫妻。オットは今年古希という。トレッキング中は黒いハットをかぶり、長身でなかなかダンディである。5 年ほど前に仕事をリタイアしてから山登りを始めたらしい。私のキャリアに比べたらほんのヒヨッコであるが、仕事上でもきっちりこなした人は何をやってもソコソコこなしてしまう。本人の弁によれば、現役のころは仕事で泊り込みなどということはしょっちゅうのことで、子育てと家事はすべて奥さんに頼りっきりであったということである。そのツマは、一回り以上年下とい　うわさもあったが、手術で鼓膜を取ってしまったということでほとんど耳が聞こえない。しかし鼓膜がなくても耳元で、大声で話せば理解できるようである。耳の遠い人の常で、相手も聞こえにくいと思うのか、話すときは声が大きい。テントが隣になったときなど、朝早くから声が聞こえる時はちょっと閉口したが、オットが“まだみんな寝ているんだから”とたしなめると、おとなしくなっていたからやはり耳元で話せば理解できているようだ。

もう一人の古希は水戸さんである。この人のキャリアは半端ではない。大学時代は山岳部では物足らずに先鋭的なクラブを創設し、ヨーロッパアルプスの岩登りにのめり込んだ。芳野満彦がアイガー北壁を登ったときには、誘われたがビビッテしまって断ったということである。大学を卒業してからもしばらくは世界中の山をフラフラしていたようである。普通良くいわれることであるが、岩とか雪とか先鋭的な山登りをやっていた人ほど、山から離れるのも早いとされている。こういう場合は社会へ出たら出たで、新しい社会の魅力にのめりこんでしまうので山なんか忘れてしまうのであろう。山関係の著作も多い“本田勝一”という人が、エベレストが登られてしまったんだからいつまでも“山だ、山だ”といっているやつは世の中の役に立たないやつだなんていっている本を読んだことがある。俺なんかまさにその口だから「悪かったネエ」と開き直るしかない。水戸さんは、その後ちゃんとした社会生活を送られて結構活躍されているようなお話であったので、突っ込んで聞いたら家業を継いだということであった。そしてその家業からも今は第一線を退いているということだ。（聞いたわけではないが、たぶん息子さんに引き継いだ）今では地元の商工会議所の役員を行ったり、社会生活と山登りの両立を立派におこなっているようである。最初のうちの高度の低いところでは半ズボン姿でサッソウと歩いていてとても古希とは思えない。穏やかな人柄は、人から頼られるに十分値する。

もう一人の男性は、電力会社勤めから 60 歳で解放されてすでに 8 年目になる四日市さん。還暦小僧の豊島さんに、“定年慣れするまでには 3 年かかりますよ”と教訓をたれている。ボウヨウとした感じで、

一眼レフを構えながら歩いている。気に入った景色があるとすぐ構えてパチリ。隊列から離れてしまってもお構い無しである。次の休みのときに追いつけば良いといったアンバイで、細かいことにとらわれない。いつもテント場では iPod と思われるイヤホーンをつけている。“クラシックですか？”と聞くと、“今はベートーベンです。”と答えた。“どんなのが好きですか？”と聞いたら、“クラシック全般なんでも良いですね。最近はエンヤが好きです。でも、オペラはだめですね”と言っていた。結構ナウイ。

次は女性軍である。まず、千葉さん。この人のいるところ、常に話し声がある。誰とでも仲良くなる。耳の遠い福島ツマに対しても、耳のところに口をくっつけて話している。家の近くに山仲間がいっぱいいるらしく、国内・海外を問わずしょっちゅう山へ行っているみたいだ。私より少し年上だと言っていたがそんな具合なので若々しい。この人と話をしていると、誰でも“苦労”・“悲しい”・“疲れた”という言葉が吹っ飛んでしまうであろう。

岩月さんもおばさんたちの山仲間でしょっちゅう登っているらしい。最初のつり橋でビビッてしまってガイドに手を引かれて渡っていた。「これからいっぱいつり橋があるのにこんなことで大丈夫かなあ」と心配してしまったがすぐに慣れたようで、さすがは山ババア。かなり小柄で、休み時間になると頭を抱え込んで疲れた格好をしていたが、何とかトロン・パスも超えた。根性ババアだ。意外にも手話ができるみたいで、耳が遠い福島ツマに手話で話しかけていたが、残念ながらツマは手話が解らなかった。

海南さんは唯一の一人部屋希望。最初はあんまり山に離れていないように見えたが、聞いてみると私と同じようにツアー登山で国内外を問わず精力的にこなしているようだ。写真に写ることを極端に嫌う。確かに美人とはいえないが、毎日行動をともにしていると味のある顔に見えてくるのであるが。『美人は 3 日で飽きるけど、ブスは 3 日で慣れる』って云うじゃないか。それに人柄がスッゴク良い。ヒマラヤではトレッキングが終わったときに、いらなくなったシャツなどをガイドやポーターなどのために置いてくる習慣があるのだが、彼女はわざわざ新しく買ってきたシャツ類をどっさり渡していた。長い旅に行く前は自分のことで精一杯でそこまで気が回らないのが普通だ。

横須賀さんはいつもスニーカーで行動をしていた。登山靴を履いたのはトロン･パスを越えた日の 1 日だけだ。登山靴が嫌いらしい。小柄で細目であるがバランスの良い歩き方で、まさに山向きだ。大人しそうな顔をしているのであるが自分の意見ははっきり主張する。血中酸素濃度の測定結果を『高所医学研究学会』に提出することに対して、提出したところで何に使っているかも知らされないという問題で皆が佐々木リーダーを問い詰めたときなど、はっきりと主張するべきところは主張していた。福島ツマのトロン・パス越えについてオットが佐々木さんに抗議していたときも同じだった。権力に立ち向かう女闘士の感がある。

川越さんは、風貌・体型・ドッシリとした落ち着き具合などすべて肝っ玉母さんである。目の前の些事に惑わされることはない。どんなことが眼前に襲ってこようと泰然自若としている。「私は私を楽しんでいるのよ」というスタイルである。案外こういった人が一番自分の収穫するべきものを得ているのかもしれない。

宇都宮さんは、若いころは結構美人だったんじゃないかなあと思わせる。スタイルも悪くない。トロン･パスといえば世界の山もたくさん登った人ばかりが来るところで、百名山は終わったとか、キリマンジャロはいつ行ったといった話題ばかりなのであるが、彼女はそのような話題には乗ってこない。それでも山登りには強い。いつも余裕で歩いている。まあ、いろんな人がいる。

４.ガイドとポーター

シェルパはわれわれが歩く時の案内やサポート役・食事時の配膳係・テントの設営と撤去などの役割をこなす。彼らにひそかにアダナをつける。エナリカズキ・舘ひろし・あごが張ったやつはアントニオなどである。エナリカズキは少年のような顔をしているが薬指にはリングがあったので、家に帰ればパパなのであろう。皆一様に若そうであるが、やはりパパであると思われる。

アントニオ・私・水戸さん・舘ひろし

アンナプルナ地域ではトレッカーの荷運びはポーターが担ぐ。昨年はわれわれがテントサイトに着いてから 1 時間くらい後にポーターが着いて、その遅さに驚かされた。同じヒマラヤでも、ヤクが荷物運びをやるエベレスト街道では、われわれがテントサイトに着いたときにはすでにテントは張られている。ところが今回は昨年よりもっとひどい。昨年は遅いッたって皆同じくらいの時間に着いた。今回は皆まちまちである。どうやらこれがこの地域の常識であるらしい。今回のポーターの荷物は馬鹿に大きい。佐々木さんに聞いたら、普通の 1.5 倍持たせているという。そういうことを決めるのはサーダーのはずであり、おとなしくて実直そうに見えるサーダーも別の顔があるのかも知れない。

ガハハマンはこのチームのナイキ（ポーター頭）である。やたらガハハハと大声で笑うのでガハハマンである。普通のナイキの役割はテントなどを持つポーターの責任者として彼らの面倒を見ることであるのだが、ガハハマンはわれわれの食事時の配膳手伝いまでこなす。トイレの汚れをこまめに清掃したり、曲がったペグの修理などのルーチン化されていない仕事で気が付いたことは率先してやっていた。歩くときもわれわれ客と一緒に歩いていた。珍しいナイキである。

ガハハマン

佐々木さんに言わせると、今回のキッチンサーダーは（食事造りのリーダー）ヒマラヤナンバー1 であり、“彼の食事を食べたらば他のキッチンサーダーのメシは食えませんよ”といっていたが、例によって味オンチの私はヒマラヤでのメシはいつもおいしいと思っているので、それほどには思わなかった。ただしヤクのステーキが出たときは、軟らかくするためにていねいに包丁の背で叩かれたようすが伺えて、きめ細かさに驚かされた。

５．マナン（3 540m）滞在

前回は、往き還り延べ 3 日すごしたマナンで今回も高所順応のため連泊する。すでに今シーズンは終了も近いとみえて閉まっている店も多い。このあたりではマナンは大都市である。飛行場・医療施設・商店・ロッジなどが立ち並び、当然チベッタン仏教関係の寺院もたくさんある。信仰の中心地らしくお寺の規模も大きく、僧侶の宿泊施設などもある。ここでは住民も信心深い人が多い。一回まわせばお経を一回読んだと同じ効果があるといわれるマニ車をまわしながらお経を口ずさんでいる人が多い。

マナン銀座通り

マニ車付ストゥパ

ほとんどの人がここで高所順応のために連泊する。われわれもそうして滞在日には裏山へ登った。一旦高いところに登って降りると、その高さでの高所順応ができるといわれている。この裏山は前回も登っている。いよいよトロン・パスへ向かって本番になる前の一服である。この高さでは空気が薄くなったとは思えないのであるが、ピサンから始まったパルスオキシメータによる血中酸素濃度測定の数字は悪かった。数字自体は特に気にするほどのことではないが、今回は海抜の低いところから徐々に高度を上げたので、周りの人は低地にいる時と変わらずに血中酸素濃度 90 以上の人が多かった。ピサンに来るまでしつこく酒を飲んでいたことが効いたか。それに高所順応登山中の反応も悪かった。マナスルなどのたくさんの 8 000m クラスの山に登った経験を持つ佐々木さんは、このくらいの高度ではゆっくり行動するのではなく、息を切らすくらいの方がいいという。今までは高所ではビスターリ・ビスターリ（ゆっくりの意）となるべくゆっくり行動するということで、“小学校の遠足だってもっと早く歩くよ”というのが常識であったが、ちょっと勝手が狂う。

		場所	酸素	脈拍
4月29日	夜	ピサン	86	86
	朝		90	79
4月30日	夜	マナン	82	94
	朝		91	74
5月1日	夜	マナン	88	81
	朝		90	66
5月2日	夜	マナン	92	64
	朝		93	67
5月3日	夜	ヤクカルカ	89	78
	朝		94	69
5月4日	夜	トロン・フェディ	84	85
	朝		87	78
5月5日	夜	ムクティナート	87	85
	朝		92	79
5月6日	夜	ムクティナート	94	79

さて、翌日からいよいよ決戦というときに、朝から雨であった。前日から雷交じりの雨模様であったので、いやな予感がしていたがその通りになってしまった。一日停滞である。まあ予備日は 2 日あるので 1 日の停滞だけですむのであればなんということはない。しかし昨年の大雪で撤退の経験があるので、“またか”というところでいい気持ちはしない。

６．トロン・パスへの道

翌日もどんよりした曇り空であったが、幾分良くなっている感じだ。青空も見える。まず 4 000m のヤクカルカへ向かう。マナンの町を下に見下ろすといよいよ本番に向かうので気力がみなぎってくる。たくさん見えていたアンナプルナ山群もⅢ峰とカンガプルナだけになった。トレッキングロードであるので道が険しくなったわけではないが、やはりマナンまでの道とは違うように受け取れる。午前中で行程は終わってしまうが、テントサイトのヤクカルカに着いても昼寝をするわけにはいかない。昼寝は血液の循環をゆっくりさせてしまうので高山病になりやすくなるとされている。高所順応のために午後は裏山へ 4 200m まで登る。この辺から今回はあまり順調でないことを認識させられる。息がゼイゼイ・ハーハーする。5 000m 以上の高さの山は今回で 7 回目であるが、こんな経験をしたことはない。やっぱり高所にしては歩くペースが早すぎるのではないかと思う。ヤクカルカのテントサイトは、高いところに来たなあと思わせるものがある。次の日は今回一番高い宿泊地であるトロン・フェディ（4 450m）へ向かう。チュルーなどの山が真近に迫ってくる。これまで見てきたアンナプルナなどははるか遠いところから見ていたので、“あー、きれいだ、きれいだ”の他人事であったが、これだけ近いと受ける印象はまるで違う。山の中に入ってきた実感を持つ。この日も到着後は高所順応で 4 925m のハイキャンプのすぐ近くまで登った。やはりヒーヒー・ゼーゼーである。今回は血中酸素濃度にしろ、この息づかいにしろ、調子が悪いのかと思わせられる。酸素の薄いところに来て意識がハイになっているのかも知れない。

ヤクカルカでのキッチンテント

７．トロン･パス

ひたすらダダッ広いトロン・パス

還暦小僧と

トロン・パスへのアタックの日は出発もまだ深夜の 4 時と、今までとは取り組みが違う。この 2～3 日の間に下で降られた雨が、この辺では雪だったのであろう。歩き始めてまもなく雪景色になった。やはり 5 000m を超えると状況は一変する。トロン･パスは世界で一番広い峠と評されているらしく、地図にも“World biggest Pass”と書かれている。 確かに広い。広いから傾斜もきつくない。それなのに足が前へ出ない。佐々木さんのペース配分に恨みを感じる。付いて行けなくて止まってしまう人も出始めた。何とか食らい付こうとするのだが、前の人との間隔がだんだん大きくなってくる。余裕のある相部屋の還暦小僧の豊島さんと、今年古希を迎える福島さんは、すいすいと私の横を追い抜いて行く。何なんだ、

これは。こんなジジババの中で遅れをとる自分が許せない。ただひたすらダダッ広いトロン･パスが恨めしくなったころ、やっとトロン･パスの標識のあるところにたどり着いた。息はゼーゼー･ハーハーどころではなくなっていた。話をするときは、まるで勝利者インタビューを受ける大相撲の力士のようであった。今にも死にそうに息苦しくしか話せなかった。やっぱり今回の歩き方はおかしいよ。

このようなコースでは大体みんな同じような行程で進む。マナンあたりから抜きつ抜かれつしながら歩いてきた外人さんたちの姿も見える。アンナプルナ地域にはフランス人が多い。アンナプルナの初登頂がフランス人であったことが影響しているのか。今回持参した小説のひとつに村上春樹の「1Q84（book3)」があったが、その村上春樹の「遠い太鼓」という本の中で、『世界を漂流しているバックパッカーで一番多いのはドイツ人である。反対に一番少ないのがイタリア人である』という一節があったが、ここでもドイツ人が多い。わたしも山登りで世界中のいろいろなところを歩いているが同感である。コロコロに太ったヨーロッパ系と思えるお姉ちゃんもいる。ヤクカルカあたりで見たときには、こんなデブには山は無理だよと思っていたが、すごい根性だ。マナン近郊のフムデ飛行場辺りで会ったフィンランド人グループもいる。男二人・女二人のパーティで、“Japanese？”と聞くから、“Yes”と答えたら、“How many members are you? ”と聞くので、“12”と答える。ひとりが“かわいい”といって仲間たちに教えるように周りの景色を指差した。こういう景色を日本語では“かわいい”っていうんだと説明しているつもりらしい。どうやら以前に日本に来たことがあるみたいだ。“かわいい”じゃなくて“美しい”だよと教えてあげたかったが、英語が出てこない。これも酸素不足のせいだ。

８．ムクティナートへ

この日の行程はトロン･パスまでの登りが 4 時間、ムクティナートまでの下りが 4 時間とされていた。地図では最初の下りの等高線が込んでいるのでヤバイところに見えた。アイゼンは不要とのことであったが、私はヤバイ時でも自分だけは助かりたいと思って軽アイゼンをザックに忍ばせていた。しかしトロン･パスのルートはメインコースであるので、雪道でも踏み跡はしっかり付いていて杞憂に終わった。下りに入ったら体調は戻った。1 時間もすると勾配もゆるくなって、後はひたすら長いだけ。こういったただ我慢の行程は得意とするところ。何も芸のない人間はこんな得意でも作らないと、どこに行ってもオジャマ虫だ。

こんなところにと思えるつり橋の脇にアヤメみたいな花があった。この季節は花が多いのであろうと思って来たのであるが、まだ早すぎたみたいで、全行程を通じて満遍なくあったのはセイヨウタンポポくらいしかなかった。

ジョムスン側にくるとダウラギリなどまた新しい山が出てきたが、例によってあまり関心はない。

９．ムクティナートからジョムスンへ

予備日が１日余ったので、翌日はムクティナート滞在である。ここは聖地とされて、ネパール国王も年１回は参拝に来ていたらしい。日本でいえば明治神宮か伊勢神宮といったところか。その中心がチャバルブーという寺院だ。さすがに立派な伽藍がいくつも建っており、内部の仏像類も由緒あるものがいくつも並んでいる。チベッタン仏教もヒンドゥも隣り合って建っていても違和感がない。ヒンドゥという宗教は、宗教としては珍しく排他性というものを持たなくて、誰とでも仲良くしようという性格を持っているということを、物知りの還暦小僧が教えてくれた。

日本では神社への参拝なんてこの何年もやったことがないのであるが、ネパールではずいぶんやっている。こんなことだから日本じゃあ恵まれた人生を送れないんだ。

アントニオはなかなか信心深いようで、仏様を見ると必ずお賽銭をあげていた。私も負けじと５ルピー札を奮発してやった。

ヒマラヤもエコにはうるさい地域である。ロッジでもエコハウスと謳っている店が多かったし、太陽光利用の湯沸かし器を街中でいくつも見かけた。

今回はなたで木を切り倒す場面にも出会えたし、水牛から搾乳している場面にも合うことができた。

アンナプルナの山の中では小さな子供はいっぱい見たが学齢期の子供は見なかった。ジョムスンについたら学齢期の子供にまとめて出会った。まさかこんな子供のうちから親元を離れて下宿しているわけではないんだろうが。

ジョムスンに続く広い川原を歩いて今回のトレッキングもやっと終わった。